

2022年9月25日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 11 章 12～19 節

説教題：「祈りの家」として

こんな話があります。「ある宗教の信者が、憎しみに燃えて敵を追跡していました。ところが遠くの寺院から祈りの時刻を知らせる鐘の音が聞こえて来ました。彼は、祈りのために布を広げて、ひざまずいて、早口に祈りました。そして、祈り終わったら、立ち上がって、また憎しみに燃えた顔つきで相手を追跡しました」。何を教える話かという、形だけの祈りの虚しさを教えるのではないのでしょうか。憎しみに駆られた心でとりあえず祈り、祈った後、何の変化も無く同じように憎しみに駆られて誰かを追いかけて行くとしたら、「その祈りは一体何だったのか」ということにならないのでしょうか。これは極端な例ですが、「祈り」は、本当に大事に祈ったら、もっと豊かなもの、もっと力あるものではないのでしょうか。

今日の箇所は、祈りについて語る箇所です。ここには2つの出来事が記してあります。「新共同訳」は、12～14 節に「いちじくの木を呪う」、15～19 節に「神殿から商人を追い出す」と、小見出しをつけています。「いちじくの木のかい」と「宮聖め」です。この2つは何を語るのでしょうか。

1. 内容：信仰の実りのない神殿の祈り

初めに書いてあるのは「いちじくの木のかい」です。前回の箇所で、イエスは、歓声に包まれてエルサレムに入城されましたが、その夜の宿は近郊のベタニヤに取られたようです。過ぎ越しの祭りの時期で「大勢の巡礼客が宿泊したので、宿の食べ物が十分ではなかったのではないかと」予想する人もいますが、朝イエス様が再度エルサレムに向かわれる時、「イエスは空腹を覚えられた(12)のです。そこで葉の繁ったいちじくの木の実—(恐らく「初なるいちじく(実が取れる前に葉と共に熟して珍味だったようです)”—を探されました。しかし、葉は見事に繁っていたけれど、実は—(「初なる実」)—ありません。ないはずですが、「いちじくの季節ではなかったからである(13)とあります。それでイエス様は—(「実が無かったことに腹を立てて」ということでしょうか)—その木をかかれるのです。しかし「実のなる季節ではなかったので実をつけていなかった。それに腹を立ててかいた」、どう考えても理不尽です。どういうことでしょうか。

多くの学者が「これは『行為による譬え』だ」と言います。イエス様は、これまでも色々な譬話を通して大切なことを教えて来られました。同じようにここでは、行為の全体として、「譬話」ではなくて「譬行為」によって大切なことを教えようとしておられるということです。では、何を語ろうとしておられるのか、その手がかりになるのが、「宮聖め」です。

イエスは神殿に入られました。神殿は3つに区別がされていました。一番外側にあるのが「異邦人の庭」と呼ばれる部分で、異邦人でも入ることが出来た所です。しかし、神殿の中央に建物があり、その建物の部分にはイスラエル人(ユダヤ人)しか入れませんでした。建物の回りに柵があって「異邦人がこの柵を越えて中に入ったら、命の保障はない」という標識が掲げてあったそうです。この出来事は、「異邦人の庭」で起こっています。

当時、神殿は、言うまでもなく「神を礼拝する」ための場所でした。「礼拝する」とは、特に「祭り」のような場合、「犠牲の動物を捧げる」とこととセットになっていました。動物に自分の罪の身代わりになってもらって神に赦しを請う。「悔い改め」と「犠牲の動物」によって「罪の赦し」を宣言され、神との交わりが回復されたのです。神殿は、そのように「真実に神に向き合う場所」として建てられたのです。確かに沢山の犠牲の動物が捧げられました。神殿礼拝は、賑わっていました。

しかし、その礼拝は、どのように成立していたのでしょうか。イスラエルの男性は、年に一度「半シケル(10000 円ほど)」という神殿税を納めなければなりません。多くの人は、それを神殿に詣でる時に納めました。しかし、「シケル銀貨」は、日常の生活には使わない貨幣です。そこで「異邦人の庭」に「両替商」がいて、手持ちの貨幣を「シケル銀貨」に替えてくれたのです。しかし、そのために彼らは、高額の手数料を取りました。また人々は、神殿で犠牲の動物を捧げましたが、遠

くから動物を連れて来るのは大変です。またせっかく連れて来ても、神殿で検査を受けて「これは傷があるから神殿には捧げられない」と言われたらどうしようもありません。そこで神殿で「検査合格済み」というシールが貼ってある動物を売っていました。しかし、その動物は驚くほど高価でした。その儲けは、商人のものとなり、さらに背後にいる祭司のものになったのです。そのように神殿が、礼拝行為を通して人々からお金を巻き上げる「集金マシン」と化していたのです。また神殿の境内—（「異邦人の庭」）—は、エルサレムからオリーブ山に抜けるための近道（通り道）として利用されていました。神礼拝など無視して、人々が往来していました。「宮聖め」の背景には、そのような実態がありました。

では、「確かに神殿では礼拝者をカモにするような商売が行われていた、だからその実態にイエス様は怒られた」ということなのでしょう。しかし、少し見方を変えれば、「シエケル銀貨」を持っていない人にとって—（法外な手数料は別として）—両替してくれる人がいれば助かります。両替商が手数料を取ることは、当然と言えば当然でしょう。現代の両替でも手数料を取られます。あるいは動物を献げなければならない人々にとって、長い道のりを動物を連れてやって来るよりも—（法外な手数料は別として）—神殿で買った方が便利ではあります。もし、彼らが高い利益を得ないで、安い手数料でこの仕事をしていたら、そうしたらイエス様は怒られなかったのでしょうか、「強盗の巣」ではなかったのでしょうか。いや、イエス様のポイントは、恐らくそういうことではないでしょう。

では、どういうことなのか。イエスは言われました。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてある…それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にした…」(17)。この言葉は何を示しているかという点、『祈りの家』でなければならない。それが『強盗の巣』になっている。イエスは「神殿について2つの可能性しかない」と言われるのです。「祈りの家」か「強盗の巣」かです。つまり、あくどい金儲けが行われているから「強盗の巣」なのではないのです。一番のポイントは、『祈りの家』になっていない、祈りが無い」ということなのです。

「祈りが無い」とは、どういうことか。この時の神殿の霊的な状態を一番良く表すのが、18節の「祭司長、律法学者たちは…どのようにイエスを殺そうかと相談した」(18)という言葉です。なぜ、彼らは「イエスを殺してしまおう」と思ったのでしょうか。自分達の間違いを指摘されたからでしょうか。「祭司長、律法学者たち」というのは、(ある意味で)彼らなりに熱心に神に仕えようとしていた人々です。「悪い」と知っていて、悪いことをしていたのではないのです。彼らが「イエスを殺そう」と、そこまで強い思いで排除しようとしたのは、「自分達は正しい、イエスが間違っている」と思っているからです。神殿で為されている行為を—（売り買いも含めて）—彼らは「正しい」と思っている。「文句を言う方が秩序を乱している」と思っているのです。彼らにすれば、イエスの方が神殿を汚しているのです。その男に群衆が心惹かれています。危険なのです。だから殺そう—（裁いて排除しよう）—とまで思ったのです。「祈りが無い」というのは、彼らの「神の御心を全く思わず、自分達の為していることを絶対化して—（自分達の宗教的信念（慣習）にしがみついて）—『私は正しい』と信じて疑わない、自分達に逆らう者、気に入らない者は殺してでも排除しようとする」、そういう姿ではないでしょうか。

神殿の礼拝は、本当にこれで良かったのか。そうではないのです。「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」(17)、これは「イザヤ書」の言葉です。「イザヤ書」にはこうあります。「主のもとに集って来た異邦人は言うな。主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな。見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。なぜなら、主はこう言われる。宦官が、わたしの安息日を常に守り、わたしの望むことを選び、わたしの契約を固く守るなら、わたしは彼らのために、とこしえの名を与え、息子、娘を持つにまさる記念の名を、わたしの家、わたしの城壁に刻む…また、主のもとに集って来た異邦人が、主に仕え、主の名を愛し、その僕となり、安息日を守り、それを汚すことなく、わたしの契約を固く守るなら、わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き、わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す…わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」(イザヤ 56:3-7)。異邦人と宦官、それはユダヤ人の蔑みめづりになっていた人々です。いわば宗教的弱者です。「そういう人が神の宮に来るならば、決して蔑まれることはない」と神は言われるのです。社会的・経済的弱者はどんな

思いをもってこのシステム化された神殿礼拝に参加していたのでしょうか。神を、神の恵みを、感じることが出来たのでしょうか。神殿は、本来全ての人に対して「神の愛と神の恵みが支配する場所」でなければならなかったのです。神殿に関わる人々は、そのことを理解し、神殿をそのような場所にしなければならなかったのです。

では、そのような「神の愛と神の恵みの支配」はどこから来るのか—(どのようにして形を現すのか)。イギリスの王族ウィリントン公が、ある時、教会で聖餐式に与っていました。彼のことを知らなかったのでしょうか、非常に身なりの貧しい男がウィリントン公の隣に立ちました。そのことに気づいた教会の役員が、その男を連れ去ろうとしました。ところがウィリントン公は、その男の腕をしっかり握って言ったそうです。「ここを動かさないで下さい。ここでは、私もあなたも神様の前に平等ですから、何の差別もないのです」。これが真実に神の前に出るということではないのでしょうか。これが「祈り」ということではないのでしょうか。人々が真実の思いを持って神の前に出る、そのことによって心の歪みが示され、心砕かれ、もう一度、謙った、砕かれた心で神の御旨を思いめぐらそうとする、そのことを通して初めて「神の愛の支配、恵みの支配」は現実の形を取るのではないのでしょうか。その「祈り」がなかった。神に向かって真実に思いを向けるところから来る「神の前に真実に生きる形」がなかったのです。

華やかな宗教儀式が行われていても、そこに「信仰の実」を見ることが出来ない。これが「いちじくの木のかんじ」を通してイエス様が言おうとされたことです。「いちじくの木のかんじ」と「宮聖め」のメッセージは1つです。幾ら豊かに葉を繁らせていても、神殿礼拝が盛んに行われ、信仰告白が盛んになされていても、そこに真実の「信仰の実(実)」がなければ、それは虚しいのです。イエス様にとって何の意味もない。それは神に喜ばれないことです。「実のないいちじく」と同じことなのです。

2. 適用：実りのある「祈りの家」として生きる

「神殿は『祈りの家』でなければならない」とイエスは言われました。「新約」において「神殿」とは、「教会」と言えるかも知れません。その意味で、私達は教会の「祈り」をもっと豊かに育てたいと願います。しかし「1 コリント書 6章 19節」にはこうあります。「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神の神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」(1 コリント 6:19)。「あなた自身が生きた神の宮であることを知らないのか。神はあなた方一人ひとりの中に住んでおられるではないか。そこで礼拝されることを求めておられるではないか」とあるのです。私達自身が神殿であれば、私達は「主に喜ばれる『実』のある神殿」でありたいと願います。

「実」とは何でしょうか。それは「神の御旨に添った信仰生活の形」でしょう。御旨とは…。イエスは言われました。「『心を尽くして、精神を尽くして、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』…『隣人を自分のように愛しなさい』。律法全体と預言者は(聖書は)、この二つの掟に基づいている」(マタイ 22:37-40)。またパウロは言いました。「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテヤ 5:22)。「神と生きる心のあり方、そして人への愛」が言われています。ある学者は「キリスト者の成長の証しは『愛と謙遜』だ」と言いました。「神への愛、御前における謙遜、人への愛、人への謙遜」、そういうことでしょうか。でも私達は、それをどのようにして手に入れれば良いのでしょうか。ヨハネは「愛は神から出ているのです」(1 ヨハネ 4:7)と言います。信仰者の「愛」は、神からもらうものです。「神への愛も、人への愛」も、神に導かれるものだと思います。その意味でキリスト者が「実」を結ぶためには、どうしても「真実な祈り」がなければなりません。「祈りの生活、祈りの家(神殿)」を自らに造ることを求めて行かなければならないのではないのでしょうか。

しかし「神の恵み、神の愛が支配する『祈りの家(神殿)』となる」とは、どういうことでしょうか。イスラエルの人々は「自分達の罪の赦し」や「自分達の繁栄」しか祈らなかつた。それらが祈られることは良いでしょう。でも、祈りの中で他者への思いはなかつた。他者のための執り成しはなかつた。

いわば、祈りの中で「自分達の益」を貪ったとも言えます。私達が「神の愛の支配」を頂く時、私達の祈りは「隣人(他者)のための執り成し」に広がって行くべきなのではないでしょうか。いや、神がそれを求めておられるのではないのでしょうか。もし私達が「神への祈り」を自分のことだけで済ませてしまったら、私達も「霊的な祝福を貪るだけの信仰生活」をしてしまうことにならないでしょうか。それは—(極端に言えば)—「自らの神殿」を、イエスが言われた「強盗の巣」にしてしまうことなのです。

中川健一という先生が次のような話をしておられました。先生が田舎の教会に呼ばれて行きました。集会に集われた方々の顔を見た時、「ここに私の準備したこのメッセージを必要としている人はいないな」と思われたそうです。ところが集会が終わった時、1人の婦人が先生の所に来てこう言いました。「本当のことを言うと、私は毎日が辛くて『いっそのこと死のう』と思いながら過ごしていたのです。今日、友達が誘ってくれたのでここに来たのですが、本当に良かった、ありがとうございます」。先生は言うておられました。「その人の笑顔の下にある辛さを誰が知っているのでしょうか。『ここに神を必要としている人はいない』と思ったこととお詫びした」。私達には、多くの人が神を必要としないように見えます。でもその人は、神の救いを必要としているかも知れません。たとえ「神など必要ない」と言われる方でも、私達皆が、人間的な罪を振りまいて生きざるを得ない。全ての人が「神の赦しと受け入れと祝福」を必要としているのです。誰が執り成すのでしょうか。私達です。1人ひとりが、そのような「主の宮」として立てられているのではないのでしょうか。

しかし、最後に確認したいのは、「祈り」は義務的なものでなく「恵みの手段だ」ということです。なぜなら、たとえ自分のためではない、「誰かのための執り成しの祈り」であっても、私達は、「祈り」の中で神に触れるのです。「足跡」という詩を何度かご紹介しています。「ある夜、私は夢を見た。私は、主と共に、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりの足跡が残されていた。一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上の足跡に目を留めた。そこには一つの足跡しかなかった。わたしの人生でいちばん辛く、悲しい時であった。『主よ。私があなたに従うと決心した時、あなたは、すべての道において、私と共に歩み、私と語り合って下さると約束されました。それなのに、私の人生の一番辛い時、ひとりの足跡としかなかったのです。一番あなたを必要とした時に、あなたが、なぜ、私を捨てられたのか、私にはわかりません』。主は、ささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。足跡がひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた』。彼女は、「祈り」の中で神に触れられているのです。神が「祈り」を豊かに用いられたのです。私達は、「祈り」の中でキリストの姿に触れるのです。そしてキリストに触れた時、私達は「自分で自分の何もかもを背負うような重荷を負った心」が静められて行くのです。「祈り」に支えられるような信仰生活を手に入りたいと願います。私達は「祈り」を通して神の器として生きることが出来るのです。